

「ポスト均、女性」はフリーライター目指す



しがらみ無いから
好きなことできる

いま、フリーライターを目指す女性が目立っている。会社を辞めた、子育てが一段落した……。リストラの嵐の中で、男性たちは組織のしがらみから抜け切れぬのに、「好きなこと」を仕事にできるのは「幸せ」と、彼女たちは思い切りがいい。

本誌 福士千恵子／撮影 平田一八

金丸さん(左)が講師を務めるライター講座でも、ほとんどが女性受講者だ(「東急セミナーBE渋谷」)

アフターファイブと呼ばれる時間帯に、デパートなどの女性下着売り場をのぞくと、一人であれこれと品定めをしている女性客が目につく。

「仕事に追われている時つて、女性としての自分を忘れがち。きれいなレースやフリルを、見たり触ったりしているだけで癒される。そんな女性たちの心理に興味があるんです」

こう話す青山まりさんは、派遣OLとフリーライターを兼業し、さらに「ブラジャー研究」をライフワークにしている。

ファッション関係の仕事をしていた時に、上着に隠れるブラジャーに興味を持ち、研究を始めた。派遣先のOLたちと話しているうちに、だれもが下着や体の悩みを持っていることに気づく。ロッカー室などでこっそり話を聞き、自分の知識や経験をもとに、買い方、身につけるコツをアドバイスする。そのうち、ブラジャーを通して、女性たちの心理や人生観までうかがえることがわかってきた。

好きなこそ

「書く」の上手なれ

2年前に「ブラジャー友の会」を結成、インターネットのホームページも作った。もともとエッセーなど「書くこと」が好きだったので、フリーライターとして、いつ

ほんどっこ」を目指す。OLの生の声を聞こうと、今も派遣で働いている。最近は一足のわらじで忙しいもの

「好きなことだから続けていける。ゆくゆくはブラジャーの本を書きたい」

と青山さんは話す。

高橋朋子さん(29)のテーマは「食」。もともと料理は好きだったが、外食産業に就職し、食材の仕入れ先である産地を訪れるうちに

「生産者の『思い』をもっと伝えたい」

という気持ちが強まった。今年初めに結婚退職し、料理修業、主婦業と両立できる仕事をとフリーを志す。

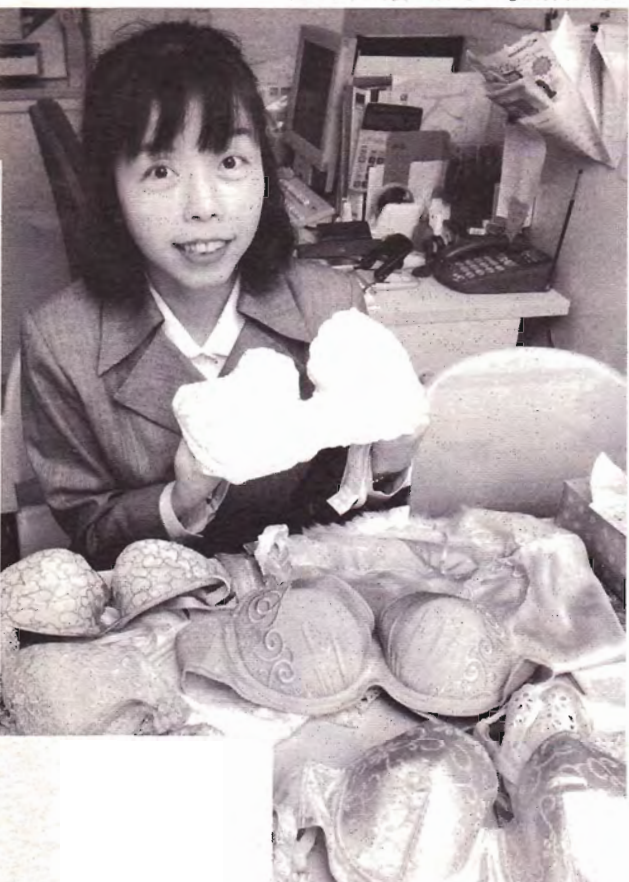
当面は夫の収入で生活をし、夫には「主婦業をおこたるな」とも言われるが

「対等にモノが言えるぐらいの収入を得ることも目標の一つ」と高橋さんは言う。

女性3人でこの10月、インターネット上に「サンデーブランチャドットコム」と名付けたサイトを開設し、食情報を提供している。そのコンテンツ(文章や画像など自身)を作るのが、主な仕事。雑誌や書籍などに書くだけでなく、こうした場面でのフリーライター需要も徐々に増えつつある。

フリーライターというと、社会正義を追い求めるジャーナリスト

「ブラジャーで食べていきたい」と青山まりさん



タイプを思い浮かべる人も多いだろうが、インターネットなどの新しい舞台で、身近な問題を身近な言葉で書くのが今風女性ライターだ。

思い切りの良さが身上

フリーのライターや編集者たちの情報交換の場として1993年、「ライターズネットワーク」という団体が結成された。創設者で代表の金丸弘美さん(48)は男性だが、現在240人いる会員のうち、6割以上を女性が占める。青山さん、高橋さんもメンバーだ。

自治体の女性センター、民間のカルチャーセンターなどでもここ数年、ものを書く、職業ライターとして独立を目指す、在宅で仕事をするなどをテーマにし

た講座が増加。こうした講座では、受講者のほとんどを女性が占めている。

金丸さんは言う。

「男性たちは、会社の中でレールに乗ることと、趣味の世界のはざままで揺れている。サラリーマンの中にもライター志望者はいらぬが、何かビジネスに結びつかないか、という発想に引きずられがち。女性は『好きだから』という理由で、ばつと飛び込む。それがかえって面白い発想を生み、出版社や編集者が『女性ライターを使おう』ということにもなる」

ある国のことを書くのに、突然、住みついてしまう。そんな「思い切りの良さ」が女性ライターの身上上だというのだ。特に目立つのは、バブル期にOL生活を送った30歳代半ばの世代。海外

旅行も趣味も満喫し、結婚や子育てを経て、「好きなこと」をもう一度追求しようというバイタリティーがある。

確かに、ライターを志望する女性の側にも、ある種の計算はある。

「書くことには元手がかからない。手取りばやく自己表現ができそうという狙いもあるのだらう。甘い考えの人もいるが、企業の側にも責任がある。『女性の時代』などともてはやしながら、多くの企業は女性に大きな期待をしなかった。企業の中で生かされなかった人材が、フリーの仕事を目指したという面もある(金丸さん)」

均等法が流れを変えた

1986年に施行された男女

雇用機会均等法の以前に(ブレ)社会人となったか、以後(ポスト)かで、「ブレ均」「ポスト均」という言い方がある。ここを境に、おのずとキャリアの積み上げ方や仕事観が変わってくるといわれ

るが、金丸さんも言うように、最近のフリーライター人気の中心に居るのは30歳代の「ポスト均」女性たちだ。

ベテランのフリーライター山田理恵子さん(40)は、「ブレ均」世代に当たる。大学での専攻は理科系。

「女子の採用は無し」とか、指定大学や学部でない人と入社試験を受けられないとか、男子に比べて就職は圧倒的に不利でしたね」と述べた。

と述べた。専攻を生かした就職は早々にあきらめ、文芸やマンガなど趣味を生かした仕事をと、編集プロダクションで3年ほど働いた後、フリーに。アニメ誌や子供向けの本、女性誌などを中心に、興味のあるテーマなら何でも手がける。シングルで自活しているが

「収入はたぶん、今の新卒サラリーマン程度。時々、実家を頼ってしまいます」。

山田さんは、「ブレ均」の終わりにごに当たる自分たちが、ある意味で変わり目の世代ではないか、と言う。

「私たちより上の世代は『女は

なことを仕事にしようと思ったから、できないことは無い。女性だからといって、結婚しなくても、子供を持たなくてもはというわけでもない」

「ポスト均」世代のフリーライター志向を山田さんは、そんなふうにもみる。

在宅ワークの長所を生かす

女性たちが、フリーライターを目指す理由の一つとして、自宅を拠点に仕事ができ、時間の使い方をある程度自分で裁量できることも挙げられる。パソコンの普及で、原稿の送稿や打ち合わせにメールを使う機会も増えた。男性に比べ、家事や子育て、介護などの負担は女性の肩に重くのしかかりがち。在宅勤務は女性にとって魅力的だ。

スポーツと地域や企業のかかわりをテーマに追うライター山本尚子さんは、病に倒れた父親の介護に直面、自宅で仕事をする必要に迫られて、会議や講演などの録音を起こしてまとめるテープライターという仕事に出合った。

父親をみとり、スポーツビジネス関連会社に5年ほど勤め、そこでの経験を生かして4年前にライターとして独立。テープライターも続ける一方で、団体機関誌などでニュースポーツやスポーツ施設などに関する連載も持つ。



高橋朋子さんはウェブサイトを作る

